伊丹市文化財調査報告

御願塚古墳環境整備に伴なう
発掘調査概報

昭和４６年１月

伊丹市教育委員会

ふみきり、その整備計画の立案を日本造園コンサルタントに依嘱し、その実施に際し一部事前調査を要するものについては、その調査方を甲陽史学会の高井に委託することとして、４４年８月作業に着手した。その間の工事の経過については別に当事者の報告があるであろうから、ここではその工事に伴う発掘調査の概要を記すにとどめる。

2. 御願塚古墳の現況

御願塚古墳は伊丹市御願塚字宮巡３２５の地にある。ここは伊丹段丘が南方へのびて、猪名川低地につながるところで一帯の平地をなすが、ここに西面して前方後円の墳丘が築かれている。東西の主軸の長さは５２ｍ、前方部は前幅１９ｍ、長さ１３ｍ、高さ２ｍ、後円部は直径３９ｍ、高さ７ｍをはかり、全体に前方部は短かくて低く、いわゆる帆立貝式の墳丘形をしめしている。その周囲に幅８－１０ｍの濠がめぐるが、付近に民家が建ちこんで周濠を埋めがちである。墳丘は二段築成でその頂部は削平されて、そこに鎮守南宮がおかれている。いま墳丘上は大きい立木と灌木の茂みとなり、その下は一帯に笹で覆われているが、その間段築部と墳頂周縁部に時に埴輪片の埋まるのが注意されるが、葺石などはみとめられない。その内部構造はいまだ明かではない。明治の初め頃、地元ではこれを天皇の陵墓として一部掘つてみたことがあり、そのとき石材の構築の一部があらわれたというが、その記録をみても、その構造ははつきりしない。またその周濠についてもそれがどれほど旧状を存するものかうたがわしい。現に明治・大正年代の古絵図を見てもその南辺周濠部は「水田」と記されており、また古老のうちにはその状況を記憶する人があり、それが現状のような濠になるについては、村の人々の手で水田の土を掘り、さらに地山をも掘り下げたことが語られているのである。（第３・４図）

つぎにいままでの採取遺物についていえば、大正年代の吉井良尚氏の記録には墳丘上で須恵質の甕の出土を実見したことが記されており、また筆者らもその封土中に埴輪片の存することを確認しているが、地元の故本田貞次氏宅にここの出土を伝える埴輪片、須恵器、土師器片や灰釉の耳皿等が収蔵されている。その出土地点やその出土状況は知られないが、一応注目すべきものである。

3. 調 査 の 経 過

昭和４４年８月古墳の環境整備の実施細目が決定して、工事がすすめられることとなった。その構想としては、すでに記したように、その墳丘の封土のくずれは土を盛って修復し、周濠はごみ、泥土を排除して浄化し、外堤部は護岸してそこを遊歩道となし、以て史跡公園として市民いこいの場としょうとするものである。（第１図）

まず古墳の封土のくずれの修復については、その崩壊が主として墳頂の南宮境内の平坦部の雨水が斜面に流れ落ちるためであるところから、それには排水路をつくって溢水をふせぎ、また封土の表面を笹等で覆うて土の崩落を防止しょうとするものである。一方その周濠の浄化と外堤部の護岸工事については、その泥土をすくい上げ、さきに４３年度に施工された下水道の配管の完備と相俟って、主として自然湧水をためて濠の景観を保ち、外堤部はその現状に即しつつ石積みして護岸するというのであった。この墳丘部における工事では封土に樹っていた埴輪の出土が予想されるし、また葺石などの遺存の有無もたしかめられる可能性も想定された。周濠部の清掃と護岸工事においては、外堤部の調査と相俟って、あるいは墳丘外部の周濠、外堤等の旧状の確認ができるかも知れないという期待がもたれた。

調査は現場主任として橋本がこれに当り、甲陽史学会関係者を中心として、阪神間の高等学校・中学校の生徒諸君の協力をえてすすめられた。作業の開始に先だち４月から６月にかけては伊丹市教育委員会、日本造園コンサルタント、甲陽史学会の三者間で工事設計、調査計画について検討がかさねられ、７月にはいっては、その成案にもとづいて再度協議をおこなった。８月にいたって現地保存会とその実施についての具体的打ちあわせをなし、準備万端ととのって８月２５日に調査に着手したのであった。（第２図）

調査にあたっては、はじめに全般的の実測をおこなうべきであるが、これはすでに４２年３月伊丹市史編纂事業の一環として、甲陽史学会の手で実施され、その成果をえており、その後に現状には変更のないところから、測量ははぶいて直ちに発掘にとりかかった。

作業は周濠の排水にともない、その進行を追うて、まず北辺参道の橋の東側

に、濠を横断する１ｍ幅のトレンチ工をいれ、ついで東辺外堤部にトレンチⅡ、Ⅲ、南辺にトレンチⅢ－Ⅵ、西辺にトレンチⅨを掘りすすめた。いま周濠はその幅のひろいところ（西辺）で１０ｍ、せまいところ（北辺）で３ｍで、外堤部は南辺、西辺に家屋がせまり、北辺が道路敷下になっているかと見られる状態にあり、外堤部としての旧状の検出には望み薄く、ただ東辺だけが内側に濠を、外側に空地を存して、旧状探査の便をのこしているように見え、ここに期待するところが多かった。しかし実際にはここも変改をうけること多く、旧状をよく残すものではなかった。

外堤部の調査が８月末には一応の見とおしをつけうるまでにいたったので、整備工事をはじめることとし、工事者（田中建設）と保存会、教育委員会、設計者をまじえて協議し、９月１日には起工式挙行、４日には着工ということになった。

工事は墳丘部よりはじめて、周濠・外堤部におよんだのであるが、その間調査作業においては、北辺トレンチ工付近に旧周濠底面を検出し、一帯に埴輪片の散るのを観察し、（９月４日－９月１２日）またおなじ北辺周濠内に盛土して安置された弁財天の基壇の下におなじく濠底面の遺存することを確認し、（９月２８日）参道の橋脚の工事にあたっても埴輪片を含んだ一部濠底の遺存するものをみとめた。（１０月４日）

以後工事は断続して年度末におよび、調査者もしたがって、その間適宜現地にのぞんで観察をおこたらず、調査は結局４５年３月末までつづけられた。その間の所見の大要はつぎのとおりである。

A　外堤部の状況

(1)　東　辺　　Ⅱトレンチによって知られたところは、つぎのようである。すなわち表土１０－１５㎝下に赤みがかった粘土質の薄い土層があり、その下すぐ礫を混じた黄褐色の地山層になっている。外堤としての現在の幅は約3.70ｍ、その内側の端から水辺までの2.５０ｍ間は埋土してコンクリート壁でとめている。その外側は地山を掘り下げて水田としていたものであり、いま地盛りして空地とすることが知られた。その内側、水辺のコンクリート壁は昭和１０年頃につくったといい、この部で外堤部が拡幅されたのであり、反対に外側はけずられて水田となり、多少短縮されたかも知れないというおそれがあり、し

たがってこの部においてすら外堤部の旧幅は確認できないこととなった。古老によればこのあたりから南側へかけて外堤部は土堤状にうずだかくなり、そこに松や雑木の木立も見られたということであるが、いま地山面の上に見られた赤みがった粘土質の薄い層は、あるいはその堆土の名残かともおもわれるのである。なおこのトレンチ内で表土中に埴輪の小片と須恵器片との数片の混入するのがみとめられた。

(2) 南　辺　　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵトレンチ内の所見では、表土の下ただちに礫を含んだ地山の層になっていて、さきの東辺におけるような赤みがかった粘土質の薄い土層はみられない。この内側水辺部では外堤地山は削られたまま周濠の底に没しており、その外側では家が軒をならべていて、その限界の検出はできない。ただこれらトレンチ内では、いずれにおいても表土中に埴輪片を多少とも混じており、一見外堤部における埴輪の樹立を臆測せしめるようである。この際地元の古老が、かつて外堤にあった松の根もとを掘って、壺のならんでいるのを見たという話がおもいあわされるのである。しかし調査の実情としては、外堤部の表土がもとの盛土であるという徴証はなく、むしろ濠を深く掘った際の排土などである可能性がかんがえられることからすると、外堤部の埴輪樹立をそれらについて速断することはつつしむべきであろう。

(3) 西　辺　　ここはさきに４３年下水管を埋設した際、その工事のため地山まで掘り下げられたところであり、外堤部はそこの採土と周濠の拡張とのために、ひどく破壊されており、その上、民家がせまって建てこんでいて、ほとんど旧状をのこすところがない。

(4) 北　辺　　ここの西半部は外堤がさきの下水管埋設工事で、その水辺側がけずりこまれており、また反対側には家屋が建っていて調査は不可能にちかい。その東半部は街道の道路敷下に入っていて観察できない。

B　周濠部の状況

周濠部はさきに記したように、明治・大正年代にその東・南部が水田となっていたもので、この度の清掃浄化過程で、この部がとくにその底を深く掘り下げられている事実が確認された。周濠の旧状の一斑は濠底の一部遺存する北側東半部において見られる。それは弁財天の旧盛土下から、Ⅰトレンチをこえ、さらに道路沿いに東へのびて、ややひろい範囲にわたる。堆積した埃土をのぞ

くと、その下に地山面がその礫を洗いだされたようにあらわれ、その表面には多くの埴輪片を散らし、その間に須恵器、土師器片も多少混じている。埴輪片には円筒形のものの他に、形象埴輪片と見られるものも多く、それらは墳丘上などから転落して、ここに埋没したものかとおもわれる。なお堆土中に古瓦片1つ採取されたが、それが比較的浅く塵芥中に存したことからみて、新しい混入とかんがえられる。

ここにおいても周濠の幅は不明であって、ただその深さが外堤部に見える地山面より約1.0m低くなっていることが知られるだけである。

C　墳丘部の状況

墳丘の截頭平坦部の南辺の排水溝会所付近で、20cm余り埋まった埴輪片が2、3片見つかった。いずれも円筒形の破片であり、その旧位置にちかいものとおもわれる。墳丘のこのラインには、いままでにも埴輪片がその下端部を固定した状況で存するのを実見していることでもあり、墳丘をとりまく埴輪列をここに推定しうるようである。また弁財天の工事中に、下段築成部でまた埴輪の固定された下端部があらわれていて、この線でも埴輪が一列めぐっていたものかとおもわれるのである。

封土の盛りかたについては、この調査ではその性質上あきらかにしうるはずはないが、ただその南側面での水際ちかくにおける一部観察によれば、封土は地山の堅い含礫土層の上に盛り土をしているらしく、木の根が多くこの両層の間を水平にはしっているのがみとめられる。封土は表面的の観察ではあるが、きれいな粘質土をつんでおり、地山の土とははっきりと識別される。周濠を掘って、その土を盛り上げたという形迹は、ここではみとめられない。

4. 出　土　の　遺　物

調査中に採取された遺物は埴輪片を主とし、その他に少量の須恵器、土師器片等を見ずる。

(1)　埴　　輪

埴輪片は墳丘上、外堤部、周濠内いずれにても採取された。その多くは円筒形の埴輪片であるが、北側のIトレンチおよびその東方拡大区域の、旧濠底とみられるところに相当数の形象埴輪片が出土した。それらは家形、蓋形などと

識別できるが復原推定は困難である。これらの多くはもと墳丘上にあったものが周濠内に転落したものであろう。

(2) 須 恵 器

小片6箇Ⅰトレンチ部で採取されている。

イ 杯 小片で復原観察も困難であるが、復原径10.5cm内外、口縁部の立ち上りは小さく内傾気味で、受部は水平である。薄手のつくりで内外水ひきのあとがきれいである。薄青灰色肌、胎土精かく焼成は堅い。

ロ 甕 口縁部と肩・胴部の小片がある。口縁部は短かく、つよく外反して口縁部は折れて二段をなす。薄青灰色肌、胎土精緻、焼成は堅い。胴部の小片は外面糸線状叩き目をつけ内面同心円状叩き文をつける。薄手で胎土精かく焼成は堅い。外面は濃い灰色、内面薄青灰色。

ハ 鉢 大形の鉢であるが小片で口径の復原も不可能である。約1.0cm厚の器壁の外面には横の掻き目、内面には左上から右下へ向って掻き目をつけ、その口縁部は幅1.0cmのところを横なでしている。口縁はほぼ水平であるが心もち内くぼみとなって外面側がたかまっている。外面薄灰色、内面薄褐色、胎土はやや粗く砂質を含む。焼成は堅い。

(3) 土 師 器

すべてこまかい破片で復原観察はもちろん器種の識別も困難である。

(4) 古 瓦

平瓦の小さい破片が1つⅠトレンチ付近で採取された。凸面は縦横になでられて、叩き目を消しているようである。(小片で明確には識別できぬ。)凹面には糸切痕と木枠痕とを残し、細かい布目を整斉につけている。薄青灰色肌、胎土は精かく焼成は堅い。

5. 考 察

この調査作業は古墳の環境整備工事に伴うものであり、古墳の全面調査ではない。われわれの仕事はまずその整備工事の仕様について、古墳の現状の観察からする提案をなすこと、つぎにその工事の実施に先だって周濠、外堤部の調査をなすこと、ついで工事実施中は工事にともない多少とも変更をうける遺跡、遺物に対する観察をつづけて、それに対する適宜の処置をなすことであった。

その結果としては、工事の仕様においては、ほぼ大過なきにちかかったが、ただ北側東半部において、弁財天・石橋の橋脚・護岸石垣等の設置に際し、遺存していた旧濠底を掘ることとなって、一部破壊するの止むなきにいたったことは、当事者としてのわれわれの見とおしの誤りであって遺憾なことであった。

つぎにこの調査中にこの古墳について、たしかめえた知見の二、三をまとめ記して、この報告のむすびとしたい。

まず古墳の墳丘についていえば、封土は地山面の上にそのまま土を盛ったようであり、その二段築成の封土の下段部と墳頂ちかい現在の截頭周縁部あたりとの二段に埴輪をめぐらしていたものと想定されるにいたったが、葺石等の遺存はついにみとめられなかった。

周濠は案外にあさく、旧地山を 1.0 m ほど掘りさげた程度のものであったらしく、一部北側に濠底部をのこしているが、その濠の幅の旧状はかならずしも明確でなく、西側の１６m、北側の３mの現状は一つはけずり拡げられたものであり、一つは埋め立てられたものであり、東、南側にみられる７mの数値もどこまで旧態を存するものかあきらかではないが、結局はこの７m以下で、さきの３m以上のものであったことは否めない。

外堤部については、その旧状を確実につかむことはできなかった。礫を含んだ地山の上に盛土したらしいことは一応推定されたが、その高さはわからず、またその幅も東側でわずかに知られた 3.７０m という数値も旧状そのままのものとはみとめ難く、これまた不明におわったといわねばならぬ。そしてまたこの部で埴輪片が散見して、この部における埴輪の樹立をうたがったのであるが、これまたそれを積極的に肯定する徴証は絶無という状態であった。

ただ北側濠中でその底面に散っていた埴輪は、多く墳丘上から転落埋没したものかと想定されるのであるが、いま墳丘上に散見する墳輪片がすべて円筒形のもので、この濠中の形象埴輪の類を見ないことに、その想定を危ぶむ向きもあるであろう。しかしいま墳頂部は削られて宮祠をおく以上、おなじ形象埴輪片を墳丘上にもとめようとすること自体が無理であろう。

遺物としては埴輪片が注目されるのであるが、それについてはすでにのべたごとく形象埴輪を含んでおり、家形、蓋形等が小片ながらも識別され、いままでこの古墳出土の埴輪に一応家形埴輪が断片ながら注意されていた旧知見を、

ここに拡大しえたのであるが、またこのことは、この古墳についての考察に新しい一資料を加えるものといえるであろうか。

これらの埴輪片と混在した須恵器片は、その多くがⅡ期(『陶邑古窯址群』の分類による)に属し、さらにⅢ期に降ると見られるものの存することは、あるいはこの古墳におけるひきつづいての祭祀等を示唆するものかとも想像される。

またこの度の採取の遺物ではないが、この古墳出土を伝える故本田貞次氏所蔵の灰釉耳皿などが、もしここの出土とすれば、この古墳に対して後ほどの人々にも関心の存したこと(それは墳墓としてよりも、あるいは小高い塚としてであるかもしれないが)も推されることであり、この古墳の今日にいたるまでの経過を考察する資料の一つに加えらるべきものであろう。

いまや御願塚古墳は土地の人たちの力によつて一応その環境整備を終え、これがあたらしく土地の人たちの生活圏の中にとりいれられて、その場を与えられ、またこのことによつて遺跡自体もよく保存されることとなつた。わたくしたちはこれを遺跡の保存と顕彰との一つのすぐれた成果として、たかく評価すべきものとおもうのである。　　(45.3.31)

調査参加者

甲陽史学会	高井悌三郎　橋本　久
	田辺征夫　木谷義紀　大野幸雄　五十川伸矢　浦長瀬隆
竜谷大学	八幡佳英
甲陽学院高等学校	和田典文　杉浦俊之
伊丹市立高等学校	小川人義　亀島重則　杉本圭孝
甲南高等学校	鷲田一郎　沢井国一　常岡　豊　谷井純一　井上恵司
離高等学校	松村純夫　伊藤　章
報徳学園高等学校	今村竜郎
親和女子高等学校	国賀直代　新川尚美　藤井由理子
松蔭女子高等学校	古林玲子
甲南中学校	片岡　昇
甲陽学院中学校	山本　均　国重雅敬　大谷文章　越智裕彦

図版目次

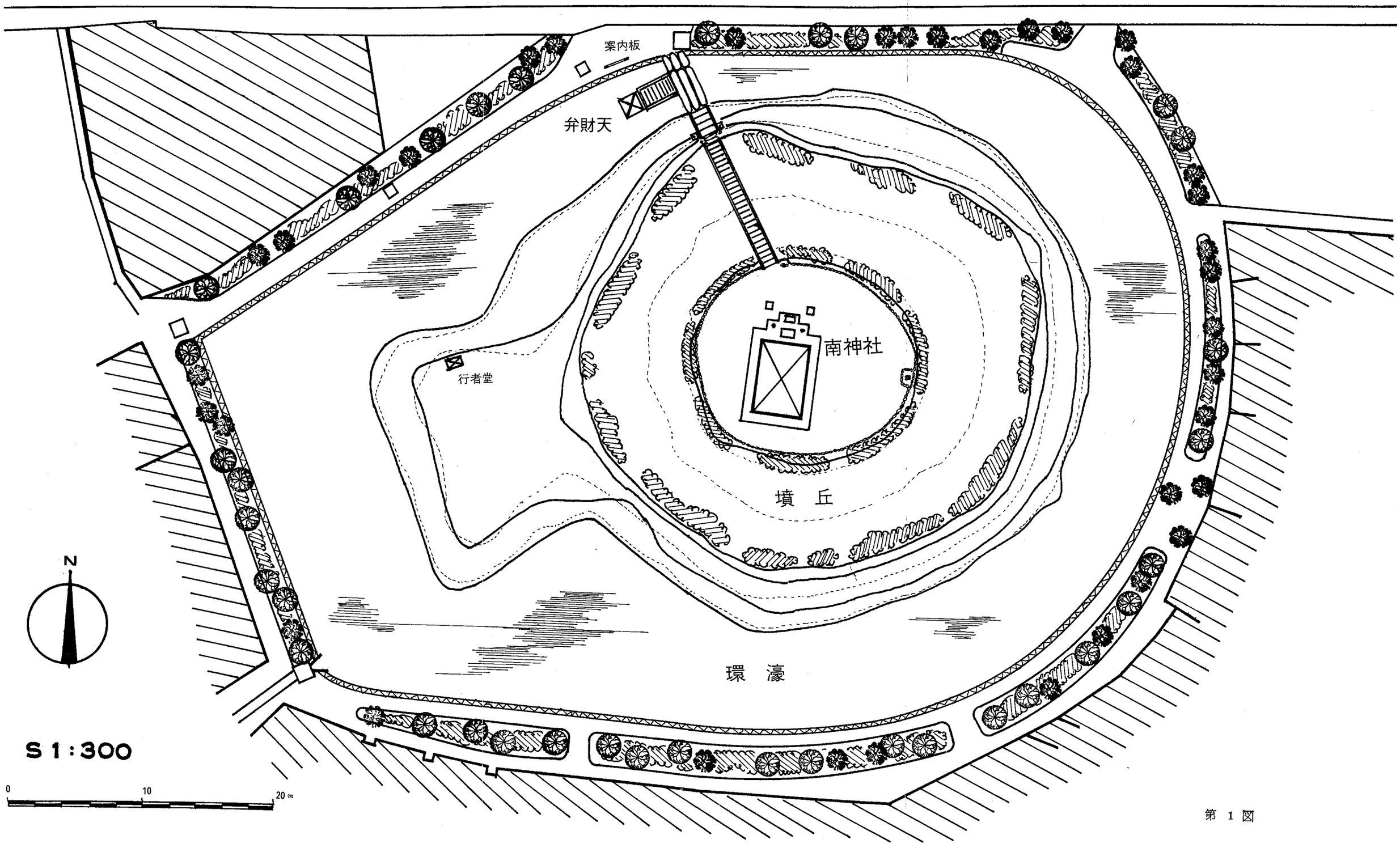
第 1 図　御願塚古墳改修工事計画図
（日本造園コンサルタント作成）
第 2 図　外堤部調査略図
（原図は伊丹市史第4巻による）
第 3 図　御願塚古墳古絵図
（本田喜応氏所蔵）
第 4 図　御願塚古墳地籍古図
（本田喜応氏所蔵）

添付写真

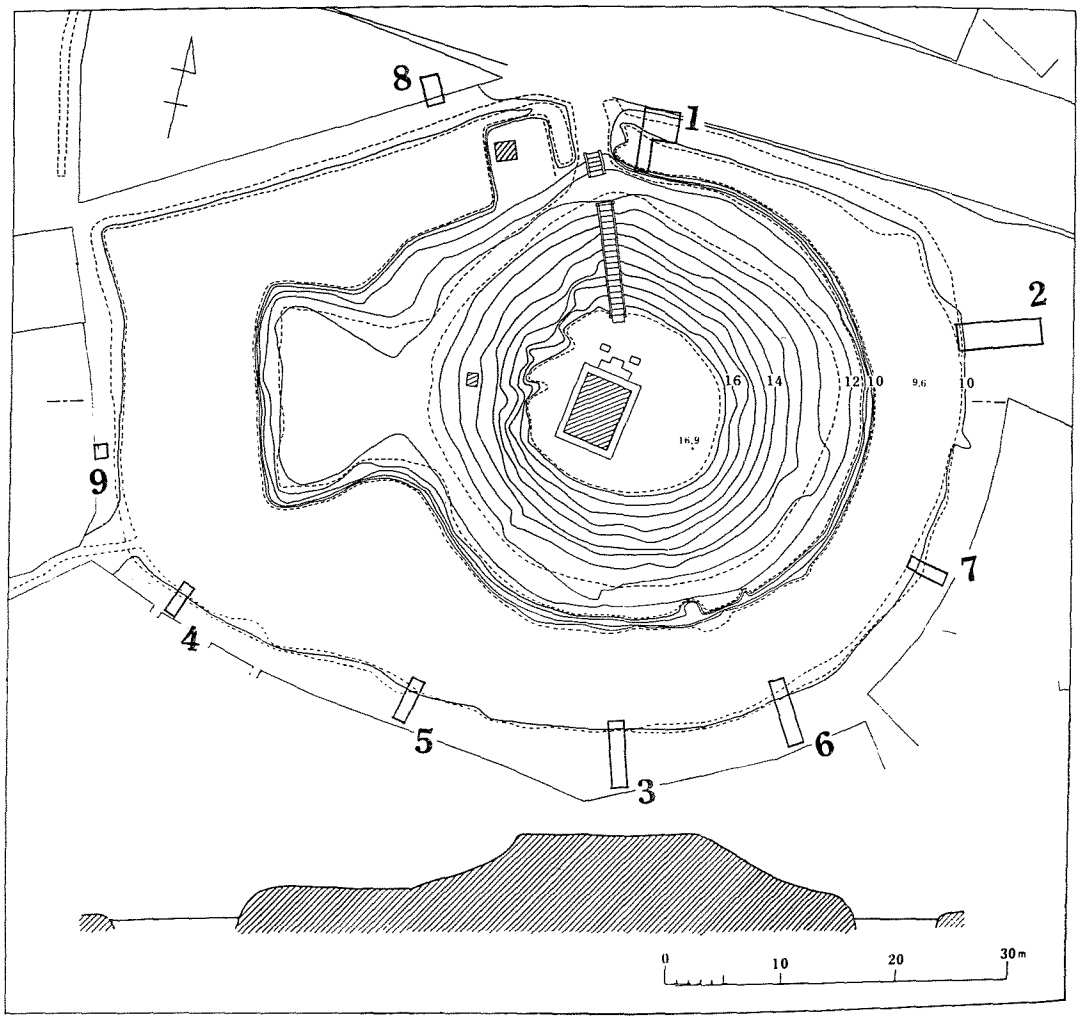
1. 遺構調査写真
2. 出土遺物　〃
3. 工事状況　〃
4. 竣　　工　〃

御願塚古墳改修工事計画図

県　道



第 1 図

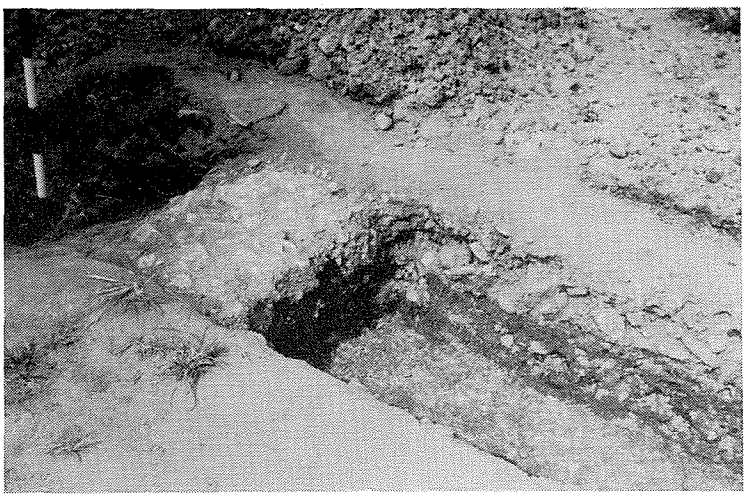


第 2 図　御願塚古墳　墳丘実測図

第 3 図

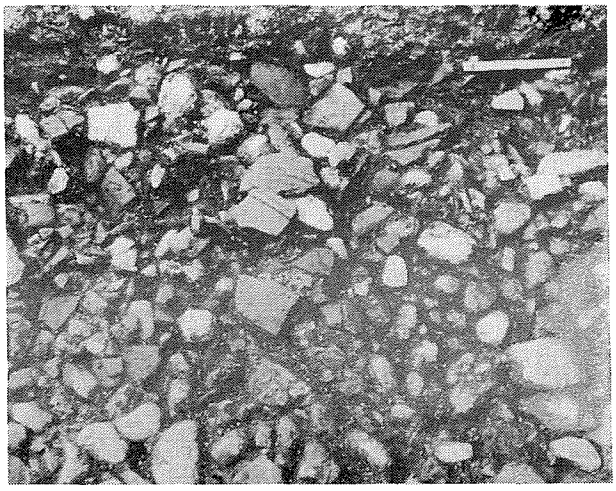
大正三年七月十四日
國有林野法ニヨリ特賣ヲ行フ

第 4 図

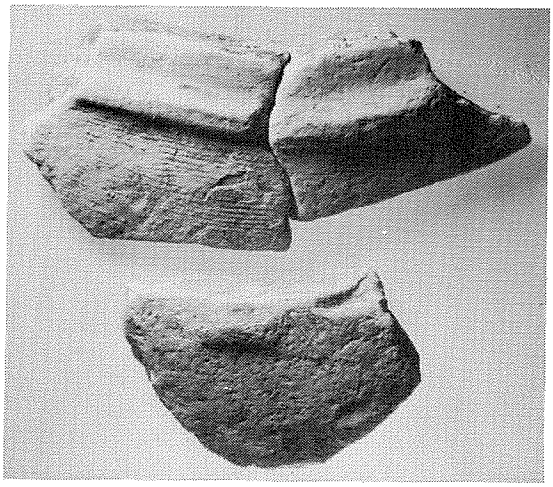


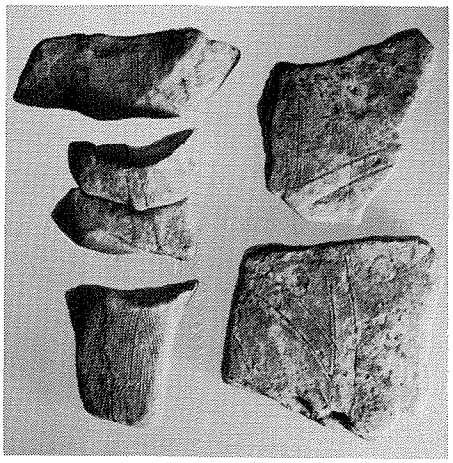
外堤部トレンチ

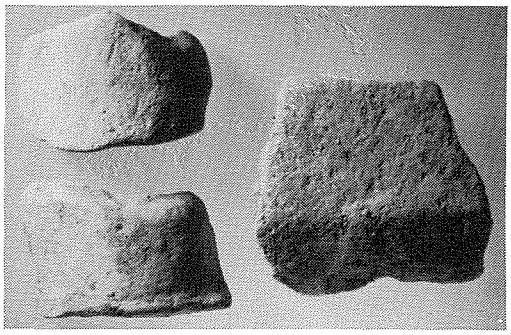
北側周濠底

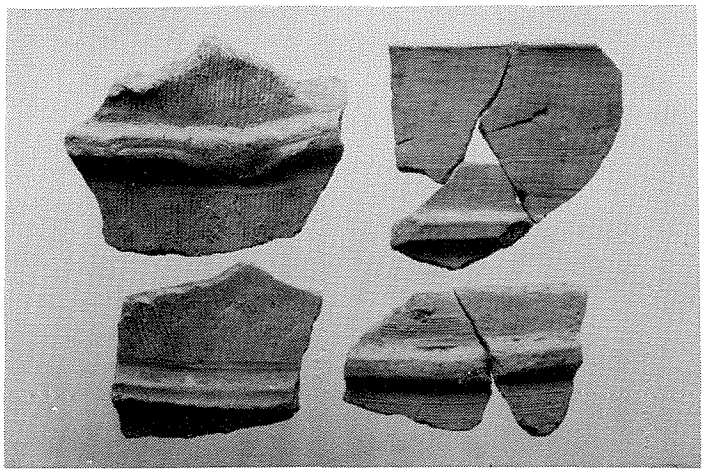


全埴輪出土状況

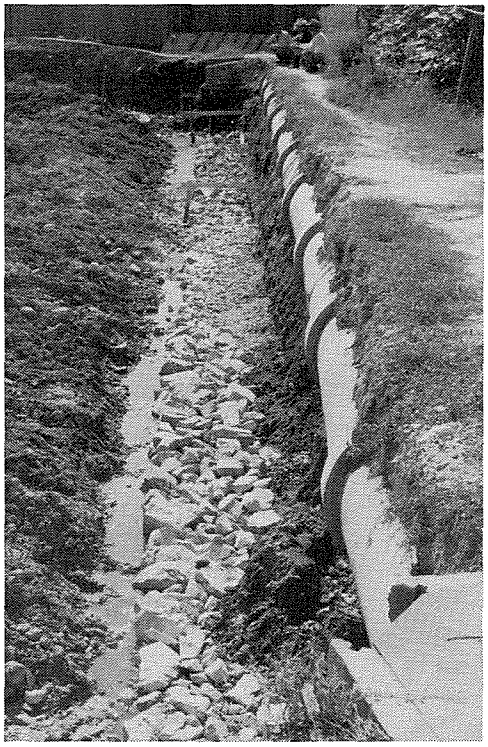




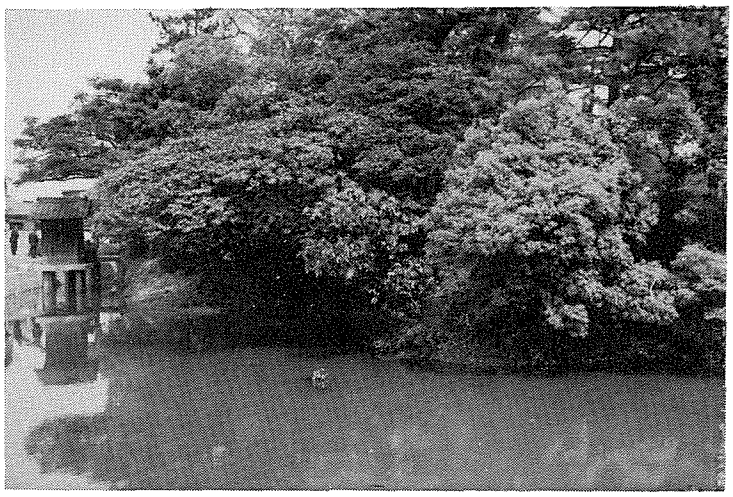




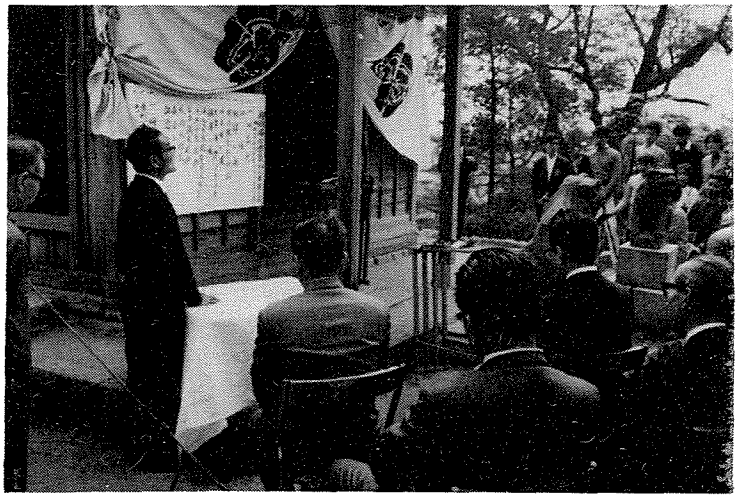
埴輪各種



北側西半部の工事



竣工の外堤部



竣工式